国労はかた

特別号

2021.11.26

国鉄労働組合博多地区本部
責任者/穴井憲寿
編集者/教宣部
事務所/博多駅東2-18-28
ジェントリー博多201

ボーナス超低額回答を受けて一言

３期連続のボーナス低額回答に社員一同言葉を失うばかりです。期日ぎりぎりまで回答を伸ばしておいて１．３２カ月ということは、交渉の初期段階において、１．０以下を平然と提示し続けていたのは明白です。これほどまでに組合側の要求との乖離が大きいのは常識的にはあり得ない話で、もはや会社側が交渉を「放棄」したも同然です。

業績が良いときは、「ボーナスは業績連動ではない。安定供給が基本である。」などとのたまいながら、いざコロナ禍で業績が悪くなると、「収入が落ち込み会社が存続の危機にあるため、ボーナスは払えない」と真逆のことを言い出す始末。何より、コロナ禍の前と後で私たちがこなしてきた仕事は同じであるのに、ボーナスの支払いは半分にするなど、普段から「同じ仕事をするなら給料は高い方がいいだろ？」とオウムのように繰り返し昇級試験の受験を執拗に煽ってくるような会社がやることとは到底思えません。

このように、嘘に嘘を重ねて社員から搾取し続ける経営の本質は**「ジャイアニズム※」**そのもの。「誠実」の二文字に抹線でもして「嘘つきは泥棒の始まり」という自戒の標語に改めた方がいい。

※ジャイアニズム・・・漫画およびアニメの「ドラえもん」に登場する主要キャラクターであるジャイアンが発した**「おまえのものはおれのもの、おれのものもおれのもの」**という言葉を思想や主義として表現した造語。自己中心的な人に対し、時に皮肉を込めた意味でこの言葉が使われることがある。

画像「アンサイクロペディア：ジャイアニズム」より引用

もちろん、今回の会社による不誠実な回答は許されるものではありません。しかしこれと同時に、「回答」を前にして、社員の間で「ここ数年は低額回答が続くよな」「西（ＪＲ西日本）が１．２５カ月だったから九州は間違いなくそれ以下しか出ないだろう」といった類のふざけた噂話が目立っていたのは、残念としか言えません。低額回答が予想されるのであれば、本来なら「何としても阻止しよう！」となるはずですが、そうはならない。会社に問題があると思ったら、それを検討し「声」として上げていくのは、私たちすべての労働者の義務であって、権利を守るための前提でもあります。言っても変わらない？変わろうが変わるまいが、自分の「意見」を出して闘っている者をフォローすることくらいは出来るはず。労働者として、「生活」を守るためのアクションは何一つ起こさず、会社に都合の良い噂話だけでワーキャー盛り上がるのは、どう考えても異常です。今回においては、わが社はＪＲ各社の中で唯一の黒字といった有力な情報もありました。にもかかわらずネガティブな発言を繰り返すのは、「どうせ私なんて相当な対価を貰うべき人間ではない」と自分で自分を貶めているのと同じ。会社から舐められるのも当然です。見方を変えれば、会社は社員の低すぎる期待に応えたとも言えるわけです。これは、労使に限らず人間社会の真実です。**「一人ひとりが自分ごととして考えましょう」**。普段、私たちの感情を逆なでしてばかりの会社フレーズがこれほどまでリアルに響くのは、何とも皮肉な話です。